

## ふたつの恐怖

2021. 8. 23

教員になって2か月が経った。この2か月間は失敗だらけの日々であった。幾度となく放課後、校長室にお招きいただき、教育的愛情のあるご指導をいただいた。うまくいかないことが続き、家に着いてから初心者マークのついた車の中で、小一時間茫然と一人反省会をしたこともあった。非常に濃密な2か月であった。この2か月間を振り返ったときに、私は2種類の恐怖に見舞われた。

その一つは、生徒に対する責任への恐怖である。私は、計3クラスの英語の授業を担当させていただいている。この3クラスの生徒は、当たり前であるが、2か月間、英語の授業は私のものしか受けていない。これがあと、約9か月続くのである。この1年間で培われる生徒の英語の力は、すべて私に責任がある。大学在学中に経験した教育実習とはわけが違う。頭では理解していたつもりであったが、実感を伴って内在化されたとき、その責任の大きさに慄然とした。

二つめが、“慣れ”への恐怖である。授業創りを始めて2週間が経ったころ、私は英語が特に苦手な生徒が気になって仕方がなかった。どうしたらその生徒たちも授業に参加できるかということに頭を悩ませていた。結局、具体的な解決策が見つからないまま2か月が経った。今は正直なところ、以前のように彼らについて考えることはなくなった。授業を進めることに躍起になっているうちに、彼らの存在が当たり前になってしまったのである。教室内に確かに存在しているのに見えなくなってしまっている。その事実を目を向けた時、戻らない2か月が重く私にのしかかった。

私は教育実習で、授業創りに楽しさを感じ、教師になることを決意した。授業が始まってからは、毎日の授業創りが楽しくて仕方がなかった。しかし、これらの恐怖を抱くようになってからは、授業後、生徒に申し訳ない気持ちでいっぱいになるようになった。ときには、授業終わりに話しかけてくれる生徒たちに、口に出して謝ってしまうこともあった。ただ、これらの恐怖のおかげで、授業の改善すべき点に正面から向き合えるようになったと思う。授業後にどうしたらよりよい授業になるか振り返ることが増え、その反省を生かした準備をしようと思うようになった。それと同時に、こうした恐怖と向き合いながら教職を続けていらっしゃる先輩教員に、純粋な尊敬を抱くようになった。

この二つの恐怖は、失ってはいけないものであると思う。この原稿は私の備忘録として定期的に読み返すようにしたい。

これは、うちのSS先生の文章である。ある会報に掲載されたものである。タイトルは「2種類の恐怖」だったのだが、今回、転載するにあたり「ふたつの恐怖」とさせていただいた。提出締切の前に、この原稿を初めて見せてもらったときの驚きにも似たような自分の感情は、忘れられない。

「これがまだ教壇に立って数か月の先生の文章か。直すところもない」

本人に聞くと、3回以上、自分で推敲したそうである。そのうえで、私のところに持ってきた。一応、断っておくが、「幾度となく放課後、校長室にお招きいただき」は誇張表現である。本人からすると、そういう印象なのかもしれないが。

「文は人なり」である。経験を重ねたからといって、すばらしい文章が書けるものでもない。「この原稿は私の備忘録として定期的に読み返すようにしたい」とある。今日から第2学期が始まる。SS先生は、きっとこの自分の文章を改めてかみしめるように読んだことだろう。SS先生をはじめ野田中学校の先生方の新たな活躍が始まる。